

留萌兼光の鋸と鋸製造用具

—2020年度寄贈資料から—

尾曲香織・池田貴夫

Key Words 鋸 (Saw)、鋸製造用具 (Saw making tool)、留萌兼光 (Rumoi-kanemitsu)

1 はじめに

(1) はじめに

本稿では、今年度寄贈を受けた鋸および鋸製造用具について報告する。

北海道博物館が所蔵している鋸は令和2 (2020) 年現在約640点ある。そのうち318点については、当館の前身にあたる北海道開拓記念館で昭和49 (1974) ～昭和58 (1983) 年の5か年にわたって実施した「北海道の伝統的生産技術に関する調査研究」の一環として、昭和50 (1975) 年に報告されている (小林ほか 1975)。この時点で所蔵している鋸のうち、銘の入ったものから、北海道内に「中屋喜八郎」「中屋重兵衛」「北海兼光」「留萌兼光」「大久保七五郎」がいたことが明らかになっている。そして、①北海道では中屋、兼光、大久保という3系統の業者が存在していたこと、②中屋系統は全国的な規模を有していたこと、③兼光系統は大正13 (1924) 年深川市の竹岡亀司氏が自身の山子の経験から独力で技術を身につけ、製造を開始したこと、④大久保系統は仙台を中心とする鋸製造業者で、明治39 (1906) 年に2代目の捨次郎が北海道の安平に移住したことに端を発していることが報告されている (山木ほか 1976: 15)。

今回寄贈された資料は、留萌市の留萌兼光鋸工業所で上記の「留萌兼光」の銘を使用していた男性が製造した鋸およびそれらの製造用具である。本稿は、北海道博物館 (旧北海道開拓記念館) 所蔵の鋸および鋸製造用具について概観した後、留萌兼光関係資料の寄贈の経緯、留萌兼光の概要、そして寄贈された資料について記述する。

(2) 当館所蔵の鋸と鋸製造用具

北海道に本州以南から多くの人々が移住してきた明治期以降、人々とともに多くの道具も持ち込まれた。特に鋸については、森林の農地への転換ばかりでなく燃料の

表1 北海道開拓記念館所蔵鋸の製造者及び製造地

製造地	収蔵点数	製造者・ただし () 内は製造地および点数
北海道	14	中屋喜八郎 (江差、6)、中屋重兵衛 (旭川、5)、北海兼光 (深川、1)、留萌兼光 (留萌、1)、大久保七五郎 (栗山、1)
秋田	13	中屋和吉 (6)、中屋儀衛門 (4)、中屋重好 (2)、中屋吉兵衛 (1)
山形	5	中屋吉蔵 (2)、中屋善二 (1)、中屋保エ門 (1)、中屋善左衛門 (1)
三条	2	中屋定二郎 (1)、中屋茂三郎 (1)
会津	42	中屋重左衛門 (4)、中屋忠左衛門 (4)、中屋真兵衛 (3)、中屋長五郎 (2)、中屋忠兵衛 (2)、中屋友右衛門 (2)、中屋長右衛門 (2)、中屋重正 (1)、中屋清左衛門 (1)、健康の日本利正 (1)、大日本鋸工場 (1)、中屋善一郎 (1)、中屋幸吉 (1)、中屋興吉 (1)、中屋来右衛門 (1)、中屋重太郎 (1)、中屋重弘 (1)、会津鋸会社 (1)、中屋重吉 (1)、中屋重久 (1)、中屋長左衛門 (1)、中屋久右衛門 (1)、中屋常右衛門 (1)、中屋光右衛門 (1)、中屋幸右衛門 (1)、中屋重三郎 (1)、中屋正右衛門 (1)、中屋正吉 (1)、中屋重五郎 (1)、中屋良治 (1)
伏見	1	谷口徳兵衛 (1)
土佐	13	林万吉 (5)、尾立貞義 (1)、尾立寅治 (1)、尾立初太郎 (1)、武田兼一郎 (1)、西村胤盛 (1)、片上茂 (1)、山崎徳吉 (1)、香西政義 (1)
三木	12	中屋徳兵衛 (2)、中屋来二郎 (1)、中屋寛左衛門 (1)、中屋俊二郎 (1)、中屋与三郎 (1)、中屋清一郎 (1)、中屋元治郎 (1)、中屋重国 (1)、神東正宗 (1)、神澤鍛錬場 (1)、龍神丸工場 (1)
合計	102	

小林ほか (1975) 第2表を一部改変のうえ転載

確保という面から生活における必需品ともいえ、当館ばかりでなく、道内の各地の博物館や資料館等でも展示されているおなじみの資料である。

そのような鋸であるが、小林らの報告した318点の鋸のうち、102点は製造者を特定できる銘が入っている【表1】。この銘によれば会津 (福島県)、土佐 (高知県)、

三木（兵庫県）など道外で製造された鋸が多い。

道内の鋸職人については先述のとおりだが、当館で所蔵する留萌兼光の銘が入った鋸は当時1点（資料名：窓鋸、収蔵番号：16672）あった。こちらは留萌市内で農業を営んでいた男性から昭和45（1970）年に受領したもので、昭和12（1937）年頃に天王寺鋸を改良して窓鋸にしたものである。

鋸の製造用具は、札幌市内の鋸製造所で使用されていた鞆が2点ある（収蔵番号：34933、82457）。このうち収蔵番号34933の鞆は、鋸の職人が長野県から移住する際に持参したものとされている。このほか鋸の製造工程を示した資料一式も所蔵している（資料名：鋸製造工程、収蔵番号：181063、全11点）。こちらは北海兼光製で、鋸板の成形した状態や荒目立をした状態の半製品であり、製造用具は含まれていない。また、山木らの調査に伴い、セン板（55235）、セン（収蔵番号：55236、55237、55238）、中グイ箸（収蔵番号：55239）といった製造用具の一部が収集されている。

（3）鋸製造業者の開業と転業

道内の製造業者について、詳細のわかっている大久保系統の例でいえば、北海道への移住者が増加し、鋸の需要が増大した明治後期に大久保系統の職人も移住した。そして移住元より弟子たちを呼び寄せ、弟子たちは移住後さらに道内各地に移り、開業した。大久保系統の本家筋にあたる職人（明治41年生・男性）は修業を経て昭和4（1929）年から添牛内、朱鞠内（いずれも現在の幌加内町）や富良野市、そして昭和22（1947）年から26年まで滝川市で鋸製造業を営んだが、それ以降は目立業を営んでいた（山木ほか 1976：15-16）。転業の理由は明記されておらず、不明である。

上記の大久保系統の職人は目立業へと転業したが、室蘭市本町において大正9（1920）年に目立屋を開業した男性は、昭和15（1940）年には札幌市内へ店を移し、昭和52（1977）年時点でも鋸の目立てを行っていた（小林ほか 1977：15）。客は札幌市内及びその近郊ということもあってか、依頼の8割が大工用鋸、2割が建具用鋸であったという。

また、鋸製造業者の転業の契機を考えるためには、鋸を利用する林業労働者の動向を踏まえて考えなければならない。北海道の林業は高度経済成長期前後に台風による風倒被害への対応が求められたり、建築用材およびパルプ用材の需要が増加した。それらに対応するため、効率よく作業ができるチェーンソーの普及もあり、それまでとは大きく変化し伐木用の山鋸の需要は減少していった。それに伴い、林業従事者も自分たちの働き方を変化させた。伐木に従事していた人々は、チェーンソーを購

入してそれまで同様伐木に従事する場合もあれば、自らはチェーンソーを購入せず、チェーンソーによる伐木の補助作業や運材など、複数の林業労働をこなすことで収入を得る場合もあった（青柳 2012：56-58）。

青柳の報告からは、林業労働者がそれまでの経験を活かしながら、生計を立てるために自らの働き方を変化させていく過程の一端がうかがえる。

鋸製造業者の全体的な傾向として転廃業があったにせよ、転廃業する経緯とその後どのような選択をしたのかは、林業従事者と同様個別の事例の蓄積が必要である。本稿では鋸製造業者の転業の一例として、留萌兼光の開業から転業、そして現在に至るまでの状況を記述する。

2 寄贈までの経緯と留萌兼光の概要

（1）寄贈希望の連絡と受領

令和元（2019）年11月2日に兼光金物店代表取締役森幹雄氏より電話にて窓鋸の寄贈を希望する旨連絡があった。森氏によると、窓鋸は森氏の父親が製作したこと、その父親が鋸製造業を営んでいたこと、かつて開拓記念館の職員が聞き取り調査を行ったということであった。電話にて対応した尾曲が、当館に収蔵されている留萌兼光の銘が入った鋸の点数と、上述した山木・小林らの報告から、彼らが森氏の父親に話を聞いたことを確認した。そして同月26日に池田とともに調査を実施した。

寄贈の申し出があった資料について、既に収蔵している留萌兼光製の鋸とは銘が異なり、後述するがその銘が作られたいきさつが、当地の暮らしを考える上で重要なものであることから収集すべきと判断した。また、鋸の製造用具も断片的にしか所蔵されていないことから、こちらも収集すべきであると判断し、館内で必要な手続きをとり、受け入れることとなった。

なお、資料の受領については、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、道内の移動が難しくなったため森幹雄氏にその旨連絡し、しばらく時間をいただいた。そして令和2（2020）年9月29日に受領した。

（2）留萌における伐採業の展開

留萌兼光が活動していた留萌市は北海道の北西部に位置する【図1】。総面積は29,783ヘクタールあり、そのうち24,582ヘクタールが林野面積と、およそ8割を占めている。平成27（2015）年の総世帯数は10,402世帯、総人口は22,221名であり、そのうち男性が10,516名、女性が11,705名である⁽¹⁾。同年の林業の経営体数は15、林家数は174戸ある⁽²⁾。

留萌の林業一主として伐採業一の状態については『新留萌市史』に詳しく、その概要は下記のとおりである。



図1 留萌兼光関係地図

留萌では、明治後期頃から農業の傍ら小規模な造材や市街地への薪の売買をする小規模な業者が存在した。大正初期に幌糠在住の室田清造が率いる室田造材が御料林において本格的な造材・用材生産を開始し、これに続いて複数の業者が参入するようになった。また、道有林においても昭和初期から業者が活動を始め、伐採業が発展してきた。

このころから戦前・戦中にかけては、雪を利用して木材を搬出する冬山造材が主であった。また、冬期間の仕事ということで、農閑期にあたるため農家の出稼ぎの一つとなっており、労働力の確保が容易であったことも一因であった。彼らは鋸や斧を用いて立木を伐採し、枝を落とす。その後一定の長さに合わせて伐る「玉伐り」という作業がなされる。そうしてできた丸太は橇に載せ、馬に曳かせて駅に敷設された土場へ運び、そこから鉄道で運搬した。

戦後は戦争被害の回復や復興、復興者受け入れのための住宅建築、燃料として大量の木材が必要となったため、林業は盛んになっていた。昭和29（1954）年5月の暴風と9月の台風（洞爺丸台風）により、風倒被害が生じ、その処理の効率化が飛躍的に進んだ。すなわち、それまでの人馬による作業から、チェーンソーやトラクターなど機械を用いた作業へと移り変わっていった（留萌市編2003：539-554）。

（3）鋸工業所から金物店へ

兼光鋸工業所で鋸を製作していたのは、寄贈者である森幹雄氏（昭和26年生）の父健二郎氏（1920～1995）である。以下、留萌兼光のあゆみについて幹雄氏から聞き取った内容を中心に書き留めていく。健二郎氏は大正9（1920）年に現在の深川市で生まれ育った。両親は広島県の尾道の出身であったという。12歳から旭川市の中屋重兵衛氏のもとで鋸の職人になるための修行を、年季のあける19歳まで修行を続けた。そして1年間の礼奉公をした。

なお、健二郎氏と同様に、大久保系統の本家筋にあたる男性（明治41年生）も、父親の弟子であった男性のもとに11歳で弟子入りし、13歳頃まではご飯炊き、掃除、子守りに従事し、14歳頃から製造に携わっている。そして20歳に年季が明け、礼奉公を1年したという（山木ほか1976：15-16）。

健二郎氏が修行中、実家が留萌市に移っていたことも影響したのか、礼奉公の後、留萌市にあった北海道造船に就職し、鋸の修理や加工に携わった。同年には深川市の北海兼光から鋸製造の技術指導を依頼されたことから、そちらへと移った。23歳となった昭和18（1943）年7月に、留萌市錦町1丁目4番地にて「留萌兼光」の名前で創業した。場所は実家のモリヤ玩具店の店舗の一角で、各種鋸製作、刃前接ぎ、大工道具、造材道具の販売を始めた。それと同時に、秋田の中屋儀衛門の山鋸、長雲齋益光の鉞の北海道特約店となった。中屋儀衛門は昭和30年代後半頃まで、毎年健二郎氏が買い取った鋸の代金を直接受け取りに来ていた。決まって冬山造材の終わった5～6月で、一泊していった。幹雄氏が小学校3～4年生頃、風呂敷に入った鋸の代金（帯封をした札束）がたくさんあるのを目の当たりにしたことがあり、とても驚いたという。

昭和20（1945）年10月には同市錦町1丁目101番地に移転し、工場を建てた。同年11月1日に「留萌兼光鋸工業所」として設立登記した。鋸を作っていたのは昭和35（1960）年、続けていても昭和40（1965）年頃までのことであった。チェーンソーの登場により、健二郎氏は今後鋸が売れなくなると考え、徐々に縮小していった。鋸を製造する際に、材料として日立安来鋼を使用しており、そちらは三条市の相場商事から仕入れていた。

そして昭和39（1964）年3月30日、「兼光金物有限公司」と社名を変更し、建築金物、左官道具、建具金物を新たに営業品目に加えた。製造は行わなかったが、鋸の目立てや修理・販売などは継続して請け負っていた。また、現在に至るまで新潟の三条市や福島県の会津地方から鋸を仕入れて販売している。

昭和47（1972）年には、社屋をより市街地であり、現在の所在地でもある旭町1丁目11番地に移転した。そして昭和58（1983）年に、長男の森幹雄氏が代表取締役へと就任し、代替わりした。

健二郎氏が鋸を製造・販売していた頃、依頼は留萌周辺や上川方面が主であった。鋸は夏場に作り、秋口から冬にかけて販売した。皆冬に山に入るからである。

現在の兼光金物店では、健二郎氏の息子である幹雄氏と義勝氏（昭和30年生）が働いている。子どもの頃から鋸製造の様子を目にすることはあったが、2人が働き始めた昭和50（1975）年前後には既に鋸を製造して

いなかった。

3 寄贈資料について

(1) 寄贈資料一覧

今回受領した資料は表2のとおり、86件109点ある。いずれも健二郎氏が使用あるいは製作したものである。用途は聞き取りの範囲ではわからないところもあったため、山木・小林らの1976年の報告や吉川の論考などをもとに整理している。

表2の1～23の工具類は、同じ木箱に入れられ保管されていた。1の入槌は鍛造の際使われる。細かな部分を打つのに使われるため、柄が極端に短くなっている。2～5のもじり槌は、大型の鋸のねじれをとる際に使用する。6～10のゆるみ槌は、名前の通り鋸板のゆるみをとる作業で使用する。11～14の目たたき槌は、アサリ出しといわれる、鋸の刃を交互に振り分ける作業で使われる。15の丸刃槌は、鋸板のくいをとるために使用される。16～20の金槌は、使途不明である。21～23はヤスリで、21については長さから4インチヤスリと推測した。同じ箱に入っていた工具のうち、槌にはいずれも持ち手の部分に「留萌兼光」の焼き印が入っている。

24～26は金敷で24は金属製、ほか2点は木製である。幹雄氏によればいずれも鋸のくいとりを使い、金属製のものは大工鋸用、木製のものは山鋸用だという。

27～29は目立て台である。27は木製の台に金属製の刃が取り付けられている。台の裏には留萌兼光の開店年月日と、目立て台の製作年月日が記されている。28と29の目立て台は兼光鋸製造所で開発したものである。北海道内で販売され、幹雄氏によれば「評判は上々であった」という。29が後発の商品で、未使用である。

30のセン板は鋸の粗削り、仕上げ削りの際に鋸板を固定するために使用される。台の固定のために必要な楔が欠けている。

31～42までが、鋸販売用のパンフレット等に使用された印刷用の印である。寄贈の際にそれまで入れてあった紙箱に「スリ印」とあったため、資料名もそちらを採用した。窓鋸の形（おそらく4枚抜き）のものが多数あり、需要があったことがうかがえる。また、山で使用する鋸とは異なる形状の鋸の印もあった。43は31～42までの印のもとになったと思われる鋸や道具の写真である。この写真をもとに、依頼して作成してもらったようである。

44～64は、それぞれ何らかの文字が刻まれた銘切りタガネである。「留」「萌」や「特」「製」などのほか、数字やローマ字、屋号「カネ森（カネは記号のㄗ）」などがあり、上部に「M」あるいは「㊦（四角の中に×

印)」のような形のアタリがつけられている。また、これらと同じ形状だが文字などが刻まれていないものが65～69である。そして70～72は銘切りタガネとともにまとめられていたが、用途は不明である。

74～78が留萌兼光製の鋸である。いずれも銘が入っている【図2】。このうち74にタコの銘が入っている。79は鋸をしまう際の本製の鞘である。

82～86は北海道内の鋸商工連合会に関する資料である。

(2) 留萌兼光の鋸とタコの銘

留萌兼光では表2にあるように多数の銘切りタガネが用意されていた。組み合わせにより「留萌兼光」や「特製」など単語となるとみられるものや、数字などがある。鋸に刻まれた銘【図2】を見た限り、今回寄贈されたものの以上に種類があったようである。特徴的な銘として、寄贈された表2の74の鋸（収蔵番号：186222）に入っているものがある。それはタコの頭の中に兼光の文字が入ったものである。この銘の由来は、幹雄氏と義勝氏によると次のとおりである。

鋸は木にあてるとき、木に吸いつくような感覚があるものが伐りやすくて良いとされているという。新しい銘を決める際、その当時製造所で働いていた漁家出身の男性が「吸いつくといえバタコだ」といったことにより、タコの絵柄が入ることとなった。

これらの銘切りタガネは自分たちで用意したものではなく、大阪の職人に依頼して製作してもらっていた。

今回受領した表2の63番の銘切りタガネ（収蔵番号：186211）は、上記の鋸に入ったものとは異なるデザインでタコが彫られており、タコの入った銘が複数あったことがわかる。健二郎氏が気に入って複数用意したものと推察される。

(3) 鋸製造業者の家族から見た山子

昭和30年代後半頃の様子について、当時子どもだった義勝氏は次のように述懐している。

山子は朝4時頃には雪をこぎながら山に入っていった。寒さのため金属が縮み、刃が割れたり、地金と鋼の間に木くずが挟まったりすることが多かった。そのため、工業所にも朝早くに修理の依頼で持ってくる人が多かった⁽³⁾。一人2～3枚の鋸を木で作った鞘におさめ、背負った来た。

当時は鋸の製造所・作業場と住まいがつながっており、家の外に出るには作業場を通る必要があった。そのため、父が鋸の修理を終えるのを待つ山子の姿をよく見かけた。

山子たちは寒い中、皆湯気の上がるストーブの周りで待っており、その間家から持ってきた顔ほどもある大き

なおにぎりをストーブで焼いて食べていた。

なお山子の冬季の伐木作業については、戦前は山の中に飯場をはって仕事をするのが一般的であった（留萌市 2003：546-547）。幹雄氏によれば戦後は交通状況がよくなっていたのか、自宅から通う人や、それとも飯場から来ていた人もいたようだ、とのことである。

4 おわりに

1970年代の調査の段階で既に鋸を手作りした経験をもつ職人が減っていたこともあり、今回道具の使用法や使用されていた名称などについては判然としない点多々あった。ただし、北海道内の鋸製造業者がどのような道具を保有していたかの一例を示せたかと思う。

今回の資料で特徴的なのが、銘にタコの絵柄を入れたという事例である。この事例からは鋸に記名し、製造者を示すというだけでなく、品質の良さも表現しようという作り手の感性が働いていることがうかがえる。留萌市及びその周辺はミズダコの産地でもあり、山子が抱く伐れる鋸の感覚を理解する兼光鋸工業所の面々にとって、タコがちょうど良いモチーフだったのかもしれない。また、この案を採用し、銘として使用した健二郎氏の、吸い付くという感覚に見合う鋸である、という自負を込めた銘であったと推測される。この銘がいつ頃から使われたのかを明らかにするのは今後の課題としたい。

また、山子の様子に関するエピソードは、彼らの日常の一コマとして今後鋸の展示をするのに合わせて紹介をしていきたい。資料（道具）の使用法や形態の違いについては、これまで多くの蓄積があり、伐木の様子再現なども当館を含め多数の博物館で展示されている。それに加え、作業以外の時間の彼らについて紹介することが、異なる世代をつなぐ一歩になるだろう。

なお、昭和50（1975）年の報告以降、当館の鋸および鋸製造用具それぞれの全体像を把握する調査は実施されておらず、約640点のうち半数は報告されていない。

この点についても今後順次報告を行っていきたい。

謝辞

資料を寄贈していただきました有限会社兼光金物店代表取締役森幹雄様、森義勝様には大変お世話になりました。また、資料整理にあたり北海道博物館舟山直治氏、右代啓視氏、三浦泰之氏にご協力いただきました。記して厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 「平成27年国勢調査」より。
- (2) 「2015年農林業センサス」より。
- (3) 山木らによれば、山子の鋸について、鋸板のくると、腰のゆるみ等の修理は山子自身で行うことは難しいため、直接鋸屋へ修理を依頼したという（山木ほか 1978：36）。なお、鋸板のくるとは鋸板の曲がり、鋸板の凹凸などを指し、腰のゆるみとは鋸板の一部が伸びた状態を指す（山木ほか 前出：37）。

参考文献

- 青柳かつら 2012. 高度経済成長期前後における北海道林業労働者の生業技術の変遷—士別市朝日町の事例—。北海道開拓記念館研究紀要 40: 45-68.
- 小林幸雄・山木雄三・笹木義友 1975. 鋸製造業と技術に関する調査(1) 一館資料の分類—。北海道開拓記念館調査報告 10: 35-41.
- 小林幸雄・山木雄三 1977. 鋸製造業と技術に関する調査(3) 一目立職人の技術—。北海道開拓記念館調査報告 14: 15-22.
- 小林幸雄 1980. VI 鋸。北海道の伝統的生産技術。北海道開拓記念館研究報告 5. 北海道開拓記念館。
- 山木雄三・小林幸雄 1976. 鋸製造業と技術に関する調査(2) 一玉鋼による鋸製造—。北海道開拓記念館調査報告 12: 15-22.
- 山木雄三・小林幸雄 1978. 鋸製造業と技術に関する調査(4) 一山子、木挽職人の鋸の修理技術—。北海道開拓記念館調査報告 16: 35-40.
- 吉川金次 1976. ものとなりの文化史 18 鋸。法政大学出版局。
- 留萌市編 2003. 新留萌市史。留萌市。

表2 寄贈資料一覧

番号	収蔵番号	資料名	数量	寸法 (mm)	備考
				1～73、80～81：幅×長さ×高さ 74～79：幅×先端の長さ	
1	186149	入槌	1	120×236×42	柄が極端に短いため「入槌」とした
2	186150	もじり槌	1	120×331×36	
3	186151	もじり槌	1	161×266×42	
4	186152	もじり槌	1	136×265×40	
5	186153	もじり槌	1	96×583×22	
6	186154	ゆるみ槌	1	121×397×40	打面に網目状の凹凸あり
7	186155	ゆるみ槌	1	121×263×41	打面に網目状の凹凸あり
8	186156	ゆるみ槌	1	110×330 (350) ×43	打面に網目状の凹凸なし
9	186157	ゆるみ槌	1	134×330×38	打面に網目状の凹凸なし
10	186158	ゆるみ槌	1	120×330×45	打面に網目状の凹凸なし
11	186159	目たたき槌	1	105×298×16	両端に凹凸の溝が切られている 柄の片側が平らに整形されている
12	186160	目たたき槌	1	93×300×15	両端に凹凸の溝が切られている
13	186161	目たたき槌	1	108×185×17	片側に凹凸の溝が切られている
14	186162	目たたき槌	1	98×301×16	両端に凹凸の溝はなし
15	186163	丸刃槌	1	93×176×23	「丸刃槌」と思われる
16	186164	金槌	1	93×302×22	「よれ槌」か「きり槌」か？
17	186165	金槌	1	120×228×21	「よれ槌」か「きり槌」か？
18	186166	金槌	1	134×334×24	名称不明、両端に凹凸の溝が切られている。 打面片側：ほぼ正方形 打面片側：横長長方形
19	186167	金槌	1	92×298×18	名称不明、両端に凹凸の溝はなし 打面片側：縦長長方形 打面片側：横刃
20	186168	金槌	1	67×210×12	名称不明、両端に凹凸の溝はなし。 打面片側：ほぼ正方形 打面片側：横刃
21	186169	ヤスリ	1	21×139×3	「インチヤスリ」のなかの「4インチヤスリ」と思われる
22	186170	ヤスリ	1	24×48×4	破片と思われる
23	186171	ヤスリ	1	12×270×4	流線型
24	186172	金敷	1	86×210×335	重さ50kg、金属製 大工鋸のくるとりに使用
25	186173	金敷	1	145×483×561	重さ25kg、木製 かすがいで割れを留めている 山鋸のくるとりに使用
26	186174	金敷	1	158×437×575	重さ28kg、木製 山鋸のくるとりに使用
27	186175	目立て台	1	750×252×165 鉄部：刃幅101×刃長610	木製（金属製の刃取り付け）、重さ9.5kg 裏に「留萌兼光 昭和二十年十月吉日開店」「各種鋸目立て 昭和十八年七月吉日製作」とある

番号	収蔵番号	資料名	数量	寸法 (mm)	備考
				1～73、80～81：幅×長さ×高さ 74～79：幅×先端の長さ	
28	186176	目立て台	1	673×462×355 鋏部：刃幅155×刃長425	重さ23kg、金属製、留萌兼光製 北海道内で販売された 使用痕あり
29	186177	目立て台	1	625×462×470 鋏部：刃幅156×刃長425	重さ20kg、金属製、留萌兼光製 北海道内で販売された 未使用、改良型、当時最新の仕様
30	186178	セン板（センかけ台）	1	居床:285×1270×211、板厚さ25 打込: 258×225×105（最大値） セン板:200×1663×20（最大値）、 板厚さ20	居床＋打込＋セン板 ※コザル（鳥居とセン板の間に挟み固定 するくさび）欠如（吉川1976:191参照） 重さ 居床：5kg、打込：0.8kg、セン板：4.5kg
31	186179	刷印	1	100×28×24	窓鋸の形 裏に「昭和□年元旦」「留萌□□…」と ある。収納されていた紙箱には「鋸用印 刷スリ印」と貼紙あり
32	186180	刷印	1	112×38×22	窓鋸の形
33	186181	刷印	1	83×29×24	窓鋸の形 金属板と木片がはがれ、3片に分離
34	186182	刷印	1	81×31×25	窓鋸の形
35	186183	刷印	1	81×23×25	窓鋸（2本）の形
36	186184	刷印	1	81×22×25	窓鋸の形 木片がはがれ、2片に分離
37	186185	刷印	1	72×20×25	（天王寺？）鋸の形 金属板がはがれ、2片に分離
38	186186	刷印	1	82×30×25	窓鋸の形
39	186187	刷印	1	70×22×25	鋸の形、種類は不明
40	186188	刷印	1	75×23×25	窓鋸の形、木片がはがれ、2片に分離
41	186189	刷印	1	65×64×25	様々な工具が印刷されている
42	186190	刷印	1	66×61×25	様々な工具が印刷されている
43	186191	写真	24	モノクロ写真	刷印製作の見本（型？）となった写真か
44	186192	銘切りタガネ	1	11×12×77	「0」の銘、欠けあり
45	186193	銘切りタガネ	1	11×12×77	「2」の銘
46	186194	銘切りタガネ	1	11×11×77	「3」の銘
47	186195	銘切りタガネ	1	12×12×77	「5」の銘
48	186196	銘切りタガネ	1	6×11×77	「8」の銘
49	186197	銘切りタガネ	1	16×16×96	「打（材か）」の銘
50	186198	銘切りタガネ	1	16×16×92	「登」の銘
51	186199	銘切りタガネ	1	14×14×68	花押の銘
52	186200	銘切りタガネ	1	16×18×79	「玉鋼打？（材？）」の銘
53	186201	銘切りタガネ	1	14×14×65	「兼」の銘
54	186202	銘切りタガネ	1	14×14×70	「作」の銘
55	186203	銘切りタガネ	1	14×14×68	「萌」の銘、胴部に「USA」とあり

番号	収蔵番号	資料名	数量	寸法 (mm)	備考
				1～73、80～81：幅×長さ×高さ 74～79：幅×先端の長さ	
56	186204	銘切りタガネ	1	14×14×65	「留」の銘
57	186205	銘切りタガネ	1	17×17×97	「製」の銘
58	186206	銘切りタガネ	1	17×17×98	「特」の銘
59	186207	銘切りタガネ	1	14×14×76	「上」の銘
60	186208	銘切りタガネ	1	15×14×75	「極」の銘
61	186209	銘切りタガネ	1	14×14×75	「大」の銘
62	186210	銘切りタガネ	1	15×14×63	「カネ森」の銘
63	186211	銘切りタガネ	1	20×23×92	タコとタコの頭の中に「カネ森」の銘
64	186212	銘切りタガネ	1	7×8×58	「F」の銘
65	186213	銘切りタガネ	1	23×16×128	
66	186214	銘切りタガネ	1	16×11×85	
67	186215	銘切りタガネ	1	16×9×75	
68	186216	銘切りタガネ	1	10×11×69	
69	186217	銘切りタガネ	1	18×12×88	
70	186218	鉄片	1	20×20×52	
71	186219	鉄加工品	1	42×60×35	
72	186220	鉄加工品	1	42×60×35	
73	186221	作業台	1	110×200×50	
74	186222	窓鋸	1	1,035×200	4枚抜き、未使用、タコの銘が入っている タコの足元に「□モイ（ルモイか）」と ある 彫りが浅いが、足はおそらく8本
75	186223	窓鋸	1	800×115	4枚抜き、未使用
76	186224	窓鋸	1	675×77	2枚抜き
77	186225	窓鋸	1	830×133	持ち手（木）付き、4枚抜き
78	186226	天王寺鋸	1	718×88	
79	186227	鞘（鋸用）	1	893×205	木製
80	186228	北海道鋸商工連合会員章	1	88×380×16	
81	186229	セン	1	55×680×35	
82	186230	〔北鋸連会員（簡易）名簿ほか綴〕	1		昭和43年9月30日現在
83	186231	北海道鋸商工連合会昭和48年度定期総会議案	1		昭和48年9月22日
84	186232	北海道鋸商工連合会昭和51年度定期総会議案	1		昭和51年10月3日
85	186233	北海道鋸商工連合会昭和58年度定期総会議案	1		昭和58年10月1日
86	186234	北海道商工正常化推進同盟発足趣意書	1		昭和50年8月、封筒入り （差出人：北海道商工正常化推進同盟、 宛先（有）兼光金物店）

資料写真一覧（数字は表2に対応）

	
1.入槌（収蔵番号：186149）	2.もじり槌（収蔵番号：186150）
	
3.もじり槌（収蔵番号：186151）	4.もじり槌（収蔵番号：186152）
	
5.もじり槌（収蔵番号：186153）	6.ゆるみ槌（収蔵番号：186154）
	
7.ゆるみ槌（収蔵番号：186155）	8.ゆるみ槌（収蔵番号：186156）

	
9.ゆるみ槌 (収蔵番号: 186157)	10.ゆるみ槌 (収蔵番号: 186158)
	
11.目たたき槌 (収蔵番号: 186159)	12.目たたき槌 (収蔵番号: 186160)
	
13.目たたき槌 (収蔵番号: 186161)	14. 目たたき槌 (収蔵番号: 186162)
	
15.丸刃槌 (収蔵番号: 186163)	16.金槌 (収蔵番号: 186164)



21.ヤスリ (収蔵番号: 186169)



23.ヤスリ (収蔵番号: 186171)



24.金敷 (収蔵番号: 186172)



25.金敷 (収蔵番号: 186173)



27.目立て台 (収蔵番号: 186175)



27.目立て台 (収蔵番号: 186175)



28.目立て台 (収蔵番号: 186176)



28.目立て台 (収蔵番号: 186176)



29.目立て台 (収蔵番号: 186177)



29.目立て台 (収蔵番号: 186177)



30.セン板 (収蔵番号: 186178)



30.セン板 (収蔵番号: 186178)



32.刷印 (収蔵番号: 186180)



34.刷印 (収蔵番号: 186182)



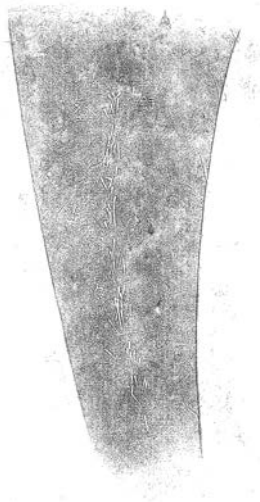
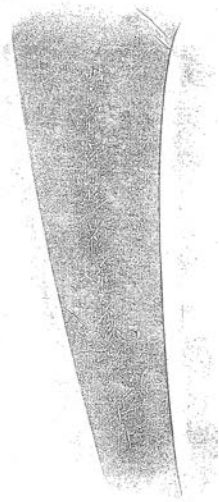
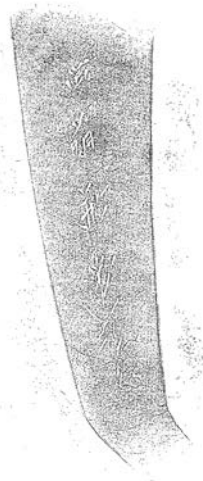
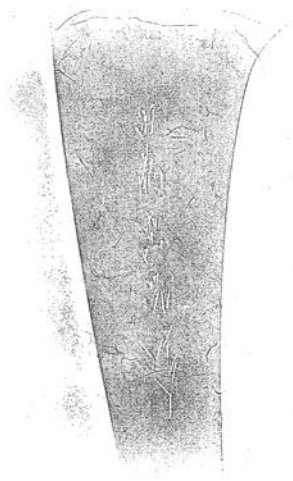
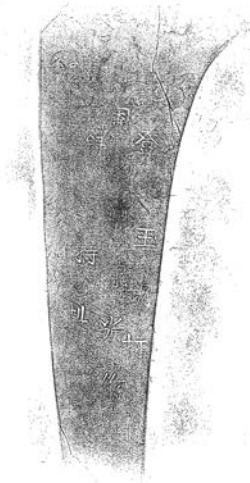
41.刷印 (収蔵番号: 186189)



43.写真 (収蔵番号: 186191)

	
44.～48. 鋸切りタガネ (収蔵番号：186192～186196)	74. 鋸 (収蔵番号：186222)
	
75. 鋸 (収蔵番号：186223)	76. 鋸 (収蔵番号：186224)
	
77. 鋸 (収蔵番号：186225)	78. 鋸 (収蔵番号：186226)
	
79. 鞘 (鋸用) (収蔵番号：186227)	80. 北海道鋸商工連合会員章 (収蔵番号：186228)

【図2】 鋸の銘

	
74. 「登録 特製 留萌□□□ ロケット鋼」※「留」の字の上にタコの銘入り (収蔵番号：186222)	75. 「留萌市住留萌兼光作」(収蔵番号：186223)
	
76. 「留萌兼光作」(収蔵番号：186224)	77. 「留萌兼光作」(収蔵番号：186225)
	
78. 「カネ森 (カネは記号の丿) 登録 玉鋼打 留萌兼光作 特製」(収蔵番号：186226)	

【図3】 タコの銘



74.鋸（収蔵番号：186222）のタコの銘



63.銘切りタガネ（収蔵番号：186211）のタコの銘

Rumoikanemitsu Saws and Saw Manufacturing Equipment: Selected Materials Donated in 2020 Fiscal Year

OMAGARI Kaori and IKEDA Takao

This paper introduces materials donated to Hokkaido Museum in the 2020 fiscal year, namely manual saws used to fell trees, and equipment used to manufacture saws. These were the products and tools of a craftsman who established and operated the 'Rumoikanemitsu' brand in the city of Rumoi. He was born in 1920, and established his business around 1945 in Rumoi. In this region, wood was not only necessary as a construction material and for household firewood, but it was also essential as a fuel for the herring processing industry. This demand gave rise to a flourishing forestry industry. Since the post-war economic recovery period, chainsaws have come into use, reducing demand for the manual saws made by Rumoikanemitsu, and the business converted to a hardware store in 1964.

The donated saws are thought to have been manufactured in the 1960s. One of the saws bears a brand with an octopus motif. The origin of this brand is related to the sensation appreciated by woodcutters and craftsmen alike that a fine saw seems to stick fast to the wood of a tree as it cuts. With octopus being a renowned local product of Rumoi, it was an obvious choice to convey the sensation of 'sticking fast' to local customers. The octopus brand mark also expresses the important meaning of the sensation that the saw is an extension of the user's body. The donated saw manufacturing equipment includes a variety of hammers, chisels used to cut the maker's name into blades, and stamps used for advertising. These valuable historical materials provide us with multifaceted insight into the trade of this saw craftsman.